

近森病院の75年を振り返って

社会医療法人近森会 理事長 近森 正幸



はじめに

1946年南海大地震の3日後の12月24日に本館A棟の地に近森外科



▲近森正博初代理事長

が開設された。父正博が診療し、母孝子が給食、部下で元衛生兵の寺尾佐多馬が事務長の3人での小さな組織から出発した。



▲1951年(S26)当時の本館(現・本館A棟)



▲1956年(S31)当時の別館(現・オルソ病院)



75年後の2021年現在では近森会グループ全体でスタッフ数1,924名、医師数151名、高度急性期から急性期、リハビリテーション、在宅まで、792床の大きな組織に成長した。

野戦病院のような病院 ～量的拡大の時代～

私が外科医として高知に帰ってきた1978年当時の近森病院は、准看護婦が当たり前の時代で、付き添いが吸うタバコのヤニで壁は真っ黄色になり、秋刀魚を焼く煙で非常ベルが鳴るような、死亡率13%の地域医療の底辺を支える野戦病院のような病院だった。

リハビリ機能をもたない救急病院は「寝たきり製造病院」にならざる

を得なかった。寝たきり患者が増えれば増床を繰り返していた。そういうなかでも、父は時代の変化に合わせて外科から分かれた黎明期の整形外科や脳外科、透析の先進的な医療を自ら勉強し、近森に導入してくれていた。外科だけではなく精神科や内科を開設するとともに、1964年6月救急病院の告示以来「救急のチカモリ」として24時間365日高知で最も多くの救急患者の受入れを行い、徐々に病院を大きくしていた。父の時代は「量的拡大の時代」であったが、一方で、重症患者を集めた院内ICUや中央手術室、検査室といった機能の集中や組織づくりに **次頁へ続く**



▲現在の近森会。江ノ口川南岸にリハ病院、北岸に近森病院本館、外来センター

▲1979年に発行された『今日の近森会II(分院落成記念)』に掲載された航空写真。旧本館及び旧北館が南北に並びその上に現在管理棟第二別館の分院、その左上に旧高知駅

近森病院、近森リハビリテーション病院、近森オルソリハビリテーション病院からのお知らせ
12月30日(木)～1月3日(月)は休診です ※近森病院救命救急センターは24時間対応いたします。

前頁から続く 合理的な考え方を近森の風土に導入してくれていた。

開院から38年後の1984年に父が亡くなった時には、近森病院は質はともあれ医師数21名、スタッフ数422名、病床数579床の大病院へと発展しており、この579床の病床がなければ今日の近森の発展は不可能だったと考えられる。

量的拡大から質的向上へ ～第一の転換期～

私が1984年に院長、理事長に就任した当時、相前後して第一次地域医療計画が施行された。病床の多い高知県では増床ができなくなり、「量的拡大から質的向上」、「物から人への転換」に運営方針の大転換を行った。選択と集中で機能を絞り込み、医療の質と労働生産性の向上を図った。

1987年には増床を伴わない近森病院初の増改築を行い、中央診療部門が完成、梶原和歌元統括看護部長を本院の総婦長代理として迎え、近森病院の基準看護が始まった。

さらに虎ノ門病院分院の石川誠先生を招聘し、1989年には近森リハビリテーション病院が開院した。回復期リハビリテーションの確立により、近森は急性期と回復期が分離され、それぞれの機能に絞り込むことで、近森リハビリテーション病院は全国有数の全館回復期リハ病院に、近森

病院は全病床を救命救急医療に絞り込み、救急搬送件数では中四国で3番目、高知でトップの屋上にヘリポートを有する救命救急センターにまで発展することが出来た。

同年、北村龍彦副院長（現部長兼システム担当顧問）を中心に総合医療情報システムが完成し、情報共有にはならない電子カルテシステムへの足がかりをつくってくれた。

こうして「基準看護」、「リハビリテーション」、「トータルコンピュータシステム」の三大プロジェクトが実現したことによって、1992年には新館も竣工し、近森病院は近代的な病院への道を歩むことになった。

地域医療連携と病棟連携 ～病院と病棟機能の絞り込み～

1999年整形外科の衣笠清人部長により、落ち着いた外来患者を徹底して地域のかかりつけの先生方をお願いして、救急と紹介、専門外来に絞り込み、「地域医療連携」がスタートした。その後、内科の先生方も同様に対応し、2002年のハートセンターの開設、ERの設置を経て、2003年には高知県初の地域医療支援病院として実を結んだ。

2011年には完全紹介予約外来制の近森病院外来センターが完成することで、地域医療連携はほぼ完成することになった。またこの年には、高知県では民間で初となる救命救急セ

ンターに指定された。これまで浜重直久副院長（現部長兼診療担当顧問）が営々と築き上げてきてくれた大内科制が救急医療に大きく貢献することになった。

2000年には入江博之部長（現副院長兼務）により、民間では高知県初となる本格的な心臓血管外科が開設され、高度急性期医療に対応するとともに、ICUが開設され、重症の患者を集中治療病棟で診て、落ち着いたら一般病棟へ移るという「病棟連携」が始まった。現在はICU18床、救命救急病棟18床、HCU28床、SCU15床、合計79床の集中治療病棟が整備されている。

病棟常駐型チーム医療 ～医師はじめ多職種の スタッフ機能の絞り込み～

2003年には臨床栄養部の宮澤靖部長（前部長）により栄養サポートチームが始まり、2006年には管理栄養士が病棟に出ることで、全国で初めて専門性が高く自律、自働する薬剤師やリハスタッフ、管理栄養士、臨床工学技士、ソーシャルワーカー、歯科衛生士などの多職種による本格的な「病棟常駐型チーム医療」がスタートした。スタッフの機能を絞り込み連携することで、医療の質を上げ労働生産性を高めるとともに、医師はじめスタッフの労働環境ややりがいも飛躍的によくなった。同年、電子



上段左から、1996年撮影「50年目の近森会」より整形外科、放射線科、検査室、下段左から、医局集合写真、「ひろっぱ」2002年6月号より「看護婦長が私服を着ています」全員集合

カルテが本格稼働し、DPCも導入されたことでチーム医療の基盤整備がなされている。

21世紀の医療に対応できる病院へ ～近森のすべてのハードが一新～

2010年には高知県初の社会医療法人となって民間の活力をもった公的病院になるとともに、同年から7年計画で近森会グループ全体の増改築工事が始まり、これから30年、40年耐えうるハードを作り上げた。

近森病院ではヘリポートを有するA棟と北館病棟、外来センターの新築やBC棟の改築により、救急部門や手術室、集中治療病棟の大幅なスペースの拡充が図られた。急性期病床は338床から452床に増床し、さらには総合心療センターの精神科104床を60床の急性期精神科病床に機能を絞り込み本院に統合した。これからの救命救急医療に充分対応出来る512床の高度急性期病院に変貌した。

近森リハビリテーション病院は2015年江ノ口川南岸のボウルジャンボ跡に新築移転し、最先端の回復期リハ病院180床となり脳卒中、脊損のリハビリを展開している。

翌2016年は近森オルソリハビリテーション病院も近森リハ病院跡地に改築移転し、整形外科のリハ病院として運営されている。

オルソリハ病院跡地には2015年

春開校した近森病院附属看護学校が改築移転し、学校上層階には近森教育研修センターが開設され、2016年より看護師特定行為研修が行われている。

2010年社会福祉法人ファミリーユ高知 高知ハビリテリングセンターの新築に続いて、2018年には、しごと・生活サポートセンターウェブが北本町に新築移転したことを最後に、近森会グループのすべてのハードが一新された。

右肩上がりの時代から 右肩下がり時代へ ～第2の転換期～

2016年4月の診療報酬改定では、重症度、医療・看護必要度が29%と強化され、看護師の数さえ揃えば診療報酬が得られるという「ストラクチャー評価」から、成果を出すことで評価される「アウトカム評価」に変わり、まさに2016年4月は高知の医療が大きく変わった「時の分水嶺」ともいえる改定であった。「右肩上がりの時代から右肩下がり時代」に時代が大きく変わったことを示している。

高知県は人口が減少し患者数が限られているところに、病院の機能分化が急速に進んでおり、なかでも近森は7カ年計画による建築コストや増床に伴う人件費増で、全国でも最も大きな影響を受けた病院であった。

2016年8月には医師全員と主任以上の管理職を集め、経営方針の大転換を打ち出した。右肩下がり時代となり、「質を保ちつつ徹底した経費の削減」を大きな経営目標とした。そのため、皆で25年間楽しんだ院内海外旅行も中止になり、中止できるものはすべて中止し、中止できないものは経費半額を目標に徹底した削減を、院内ばかりでなく病院がお世話になっている企業の皆様のご協力も得て実行した。さらに理事会の若返りを図り、部科長会も診療責任者会議に、各種委員会などもすべて再編成し、活性化を図り短時間でアウトカムの出せる会議に転換した。

これまではトップダウンで医療環境を整え、スタッフにいきいきと働いてもらえば病院の運営は順調に行われていたが、これからは情報を公開し、みんなが心をつなげてボトムアップで変革する時代になった。時代は今、大きく変わろうとしている。

おわりに

この数年で、新型コロナウイルス感染症をはじめ病院を取り巻く環境は大きく変わり、厳しい時代を迎えている。今までの発想にとらわれない自己変革を限りなく続け、高知の救命救急医療の基幹病院として、高知の「地域医療を守る最後の砦」として、使命感をもってその責務を果たしていきたいと決意している。



近森会の思い出：よさこい、運動会、職員旅行、海外学会参加、そると

疼痛に苦しむリウマチ膠原病患者さんの 早期診断の一助となる検査を



近森病院 リウマチ・膠原病内科 科長 吉田 剛

学会：第29回日本シェーグレン症候群学会 9月24、25日
論文：'Detection of nerve enlargement with ultrasound and correlation with skin biopsy findings in painful neuropathy associated with Sjögren's syndrome.'



表題の件につきまして、私が執筆した原著論文が国際的に高い評価を得ているとされ同学会において奨励賞を受賞しましたので、ご報告いたします。

シェーグレン症候群とは

シェーグレン症候群は関節炎などの炎症性筋骨格系疼痛、線維筋痛症、

神経障害性疼痛などの多彩な原因による慢性疼痛を生じます。シェーグレン症候群に合併する有痛性ニューロパチーは、非典型的な疼痛症状の訴えのため、病歴聴取による診断が難しいことがあります。また、神経学的診察や神経伝導検査などの従来の診断法では、客観的な異常を同定することが難しいとされてきました。

研究テーマ

我々は、シェーグレン症候群症例において、末梢神経エコーが合併するニューロパチーの診断および評価に有用であるかを、下肢の皮膚生検による表皮内神経線維密度の測定結果と比較することで検討を行いました。11例のpSS-PSN症例では、ニューロパチーを有しない17例と比較して有意に腓腹神経の横断面積が大きく、この腓腹神経の横断面積は表皮

内神経線維密度と有意な正の相関を示すことを明らかにしました。

臨床への貢献

本研究は、侵襲のないエコー検査によってシェーグレン症候群に合併するニューロパチーの末梢神経の形態学的変化が捉えられること、そしてこの変化が病理学的所見と有意に相関することを明らかにし、臨床における有用性があることを示しました。大きな unmet needs が存在する領域において、疼痛に苦しむ患者さんの早期診断の一助となる検査を考案した点が、本研究の臨床への貢献であると考えています。これからも、リウマチ膠原病の患者さんの痛みや神経症状に寄り添いながら、最先端の医療を提供できるように、研鑽を積んでいきたいと思っております。

よしだ たけし

12月の歳時記

ビオラ

総務部総務課 久保 菜月



ビオラというお手頃価格で売られており、どのお庭にも植えられているみんなの好きな花、という程度の印象でした。しかし花好きの方に話を聞くと、秋から春にかけて花を咲かせてくれ、手入れ次第では株を大きくしたり挿し芽で増やせたりと実は奥深い花だそうです。歳時記を機に私もビオラを購入したので、株が大きくなる育て方をしてみようと思います。

くぼ なつき

絵も筆者：筆者は大学院まで美術を専攻。和紙にアクリル絵の具で描いてもらいました。誌面では伝えきれませんが和紙の風合いと優しい色使い、素敵な作品です。(所属長より)



近森看護学校通信 60



統合看護学実習

近森病院附属看護学校 専任教員 川村 佳代

3年生37名は、10月25日～11月5日の2週間、近森病院で統合看護学実習を行わせていただきました。3年生は、新型コロナウイルス感染

症の関係で臨床現場での実習経験が少ないため、不安と期待が入り交じったスタートとなりました。

本実習では、既習の知識や技術を統合して優先度を判断し看護実践を行ったり、看護管理の実際について学ぶことができました。また、多職種で患者さんに関わるチーム医療の一員であり組織人であることなども体験し、来年度4月から新人看護師として働く心構えを培うことができました。皆様、ありがとうございました。 かわむら かよ



▲学内での統合看護学実習風景

糖尿病薬の副作用による重症低血糖を防げ！



低血糖リスクの高いSU薬

高知は日本第二位の高齢者県である。高齢者では臓器機能が低下し薬物代謝が障害されると、高濃度で血中に残る薬剤は副作用につながり易い。重症低血糖が高齢者に多い診療上の問題と指摘されたのは2016年のことである。高齢者の安全な薬物療法ガイドライン2015の糖尿病の項目では、低血糖リスクの高いSU薬の使用は可能な限り控えて、代替にDPP-4阻害薬を考慮すると記載されている。

当院ではSU薬処方はずっとの2.6%

ところで当院に搬入される重症低血糖患者数はその後も減っておらず、低血糖の発症につながるSU薬、インスリン、グリニド薬の使用は減らす必要がある。当院ではSU薬の処方は年々減少し、昨年度は2.6%と全

『高知モデル』

—重症低血糖予防に向けた新しいうねりに

近森病院 糖尿病・内分泌代謝内科 部長 公文 義雄

(高知から低血糖症をなくし隊！)

処方中最低となった。SU薬はDPP-4阻害薬と併用すると非併用に比べ低血糖の頻度が高いが、極々少量のSU薬なら安全に使用できる印象である。DPP-4阻害薬は最も広く使用されており、併用するSU薬を減らさざるを得ない。

低血糖は理論上半分にできる

高知から重症低血糖をなくすために『高知モデル』を提唱している。SU薬はグリメピリドなら最少単位剤

型の0.5mg錠のみ採用し分割して使用する、インスリンなら持効型を少量使用する、HbA1cは目標下限値を厳守して緩めにすべきで処方時に薬剤師など第三者の指摘があれば受け入れる、などである。この取り組みは専門外の医師に向けた高齢者糖尿病診療のフォーミュラリーであり、実現できれば重症低血糖の搬入数は理論上半分以下に減るはずである。

くもん よしたか

高齢者糖尿病の血糖コントロール目標 (HbA1c値)

患者の特徴・健康状態	カテゴリーⅠ		カテゴリーⅡ		カテゴリーⅢ	
	①認知機能正常 かつ ②ADL自立		①軽度認知障害～ 軽度認知症 または ②手段的ADL低下 基本的ADL自立		①中等度以上の認知症 または ②基本的ADL低下 または ③多くの併存疾患や 機能障害	
重症低血糖が危惧される薬剤(インスリン製剤、SU薬、グリニド薬などの使用)	なし	7.0%未満	7.0%未満	7.0%未満	8.0%未満	8.0%未満
	あり	65歳以上 75歳未満 7.5%未満 (下限6.5%)	75歳以上 8.0%未満 (下限7.0%)	8.0%未満 (下限7.0%)	8.5%未満 (下限7.5%)	8.5%未満 (下限7.5%)

出典：日本糖尿病学会・日本老年医学会 合同委員会

私の趣味

筋肥大

画像診断部 診療放射線技師

小倉 啓伍



私の趣味といえば、筋トレです。かれこれ4年半くらい続けています。大学生の時に友人にジムに誘われ始めた筋トレも、最初は週2～3回くらいでしたが今は週6回になり、トレーニング時間は2～3時間くらいしています。最近はオンラインサロンに通っており、細かなトレーニングの知識を学んでいます。

よく筋トレの何が楽しいのか？と聞かれますが、私にもわかりま



せん。習慣とは怖いもので、ジムに行きたくなくても行きます。特に、脚トレの日は、憂鬱でやりたくありません。高い緊張感があり、しんどいし、脚は震え、筋肉が焼けるような痛み(バーンと言います)が走ります。ただ筋トレ中は、目の前の重りを、限界を超えるまで上げるという意識しかなく、他のことは何も考えられなくなります。それを繰り返していくと、重りがだんだん増えてい

き、見た目が変化していきます。そういった小さな成功体験にやりがいを感じています。ほかにも筋トレのやりがいは多々ありますが、書ききれないため省略します。

ここ最近では、日本トップクラスのボディビルダーのパーソナルトレーニングを受けてみたい思いでいっぱいですが、コロナ禍のため県外に行けず、非常に残念です。あくまで、旅行ではなく筋トレが目的ですが、早く平穏な日々に戻ってほしいです。 おぐら けいご

30周年 1976年 近森病院 352床、職員数 256名

社会医療法人近森会

▼前列右から寺尾事務長、近森正文（正博の兄）、正基（同父）、正博（先代理事長）。当初は木造平屋 60坪の診療所だった



▲手術室。当時の総手術件数は1976年838件であった。救急病院であり緊急手術が多く、外傷の占める割合が高かった。医師13名、看護部129名、薬剤師6名、放射線技師4名、栄養士4名、検査技師7名、理学療法士3名、透視技師3名、ほか合計256名

▼1979年「今日の近森会（II）」より。下段中央が正博前理事長、上段中央が正幸理事長。正博理事長右隣が初代ひろっば編集委員平野政夫先生、左隣が野村好直事務長。中田七百子医局秘書とともに



◀1987年増築された集中治療棟のICU 2床

▼ffマーク、スカイブルーとフリーダム&フレキシビリティ（自由、柔軟）を現している



近森会の出来事

月日

西暦

近森会の出来事	月日	西暦
近森外科開設（8床）	12月24日	1946
近森病院開設許可	6月25日	1948
有限会社近森病院設立	10月1日	1949
医療法人近森会設立（使用許可）	9月7日	1950
呼吸器科開設		1951
整形外科開設	6月	1952
救急病院告示	6月30日	1958
内科開設		1964
本館隣地に手術センター及び病棟増築（地下1階5階建）《I期棟》	12月15日	1967
脳神経外科、精神科開設	4月	1968
本館（地下1階7階建）改築《II期棟》（現本館A棟）	1月20日	1973
消化器科開設		
人工腎臓設置透析療法開始	6月4日	1974
本館増築（地上9階建）《III期棟》、理学療法科開設	7月1日	1976
麻酔科開設	4月	1979
精神科病棟新築	4月12日	1983
新7病棟を第二分院と改称、本院の精神科床廃止	10月1日	1984
泌尿器科開設	10月	
形成外科開設	11月	
近森正博理事長逝去、近森正幸理事長兼 近森病院院長就任	11月26日	
寿平安閣を購入、管理棟に改装（現北館東側）	9月9日	1985
本館増築工事着工	5月24日	1986
リハビリテーション科開設（石川誠）	6月9日	
「ひろっば」創刊	7月15日	
分院基準看護体制スタート	10月1日	
近森病院中央診療部完成	2月	1987
小児外科開設（北村龍彦）	12月1日	
近森病院基準看護特2類、特3類承認	6月1日	1989
トータルコンピューターシステム第一次稼働	7月1日	
近森リハビリテーション病院開院	12月1日	
近森会シンボルマーク決定	12月1日	
新館竣工	7月27日	1992
老人保健施設いごっばち開設	12月1日	1993
在宅総合ケアセンター開設	4月1日	1994
第二分院に精神科訪問看護ステーションラポールちかもり開設	1月5日	1996
在宅総合ケアセンター近森完成	5月1日	1998
高知メンタルリハビリテーションセンター開設	5月1日	1999
心臓血管外科開設	7月1日	2000
ICU（特定集中治療室）開設	7月	
近森リハ病院回復期リハビリテーション病棟届出受理	8月	
ER、ハートセンター開設	10月1日	2002
総合心療センター近森 第二分院新築	11月1日	
近森病院地域医療支援病院承認	2月25日	2003
近森病院管理型臨床研修病院指定	10月	
近森病院 DPC 導入、看護基準 7:1	4月1日	2006
近森正幸が社会福祉法人ファミーコ高知理事長に就任	4月1日	
電子カルテ本格稼働	10月1日	
近森オルソリハビリテーション病院開院	10月1日	2007
高知リハビリテーションセンターが高知県より移管を受けて事業を開始	4月1日	2008
近森会病院五カ年計画開始	1月	2009
近森病院災害拠点病院指定	9月11日	
近森会健康保険組合設立	10月1日	
社会医療法人認定	1月1日	2010
近森病院救命救急センター指定	5月16日	2011
近森病院外来センターでの診療開始	11月7日	
近森病院北館完成	4月2日	2012
近森病院新館改修完成	7月31日	
近森病院・近森病院第二分院統合	10月1日	2013
近森病院本館 A 棟完成	7月31日	2014
近森病院附属看護学校開校	4月1日	2015
近森リハビリテーション病院新築完成	8月15日	
近森オルソリハビリテーション病院移転改築	1月30日	2016
近森教育研修センター・近森病院附属看護学校改築完成	5月14日	
理事会新体制スタート	10月1日	
近森病院 院長・副院長新体制へ	1月1日	2017
近森病院 地域包括ケア病棟導入	11月1日	
しごと・生活サポートセンター ウェーブ 名称変更・新築移転	5月21日	2018
歯科医による周術期等口腔機能管理 開始	4月1日	2019
地域医療連携推進法人「高知メディカルアライアンス」(KMA) 認定	12月28日	2020
救急医療功労者 厚生労働大臣表彰	3月3日	2021
近森病院 病棟機能再編成	4月1日	
75周年記念事業スタート	6月24日	
	12月24日	

30

50

「救いたい」想いひとつに 未来へと

75 周年沿革

50 周年 1996 年

近森病院 387 床、第二分院 104 床、
リハ病院 145 床、合計 636 床、職員数 877 名

元号	月日	社会の出来事
昭和 21	12月21日	南海大地震
昭和 23	7月30日	医療法公布
昭和 24	11月3日	湯川秀樹が日本人初のノーベル賞受賞
昭和 25	1月7日	千円札発行（聖徳太子）
昭和 26	1月3日	第1回NHK紅白歌合戦放送
昭和 27	4月10日	NHK ラジオドラマ「君の名は」放送開始
昭和 33	12月1日	一万円札発行（聖徳太子）
昭和 39	10月10日	東京オリンピック開催（～24日）
昭和 42		日本血液銀行協会、売血の全廃を決定
昭和 43	12月10日	3億円強奪事件
昭和 48	10月6日	オイルショック
昭和 49	10月14日	巨人軍長嶋茂雄の現役引退
昭和 51	2月	ロッキード事件発生
昭和 54	10月26日	「金八先生」放送開始
昭和 58	4月15日	東京ディズニーランド開園
昭和 59	3月18日	グリコ・森永事件発生
昭和 60	8月12日	日本航空 123 便墜落事故
昭和 61	4月26日	チェルノブイリ原発事故
昭和 62		
平成元	4月1日	国鉄民営化
	11月9日	ベルリンの壁崩壊
平成 4	4月25日	歌手の尾崎豊が死去
平成 5	10月28日	ドーハの悲劇
平成 6	6月27日	松本サリン事件発生
平成 8	12月2日	アムラーが流行語トップテン入賞
平成 10	2月7日	長野オリンピック・パラリンピック開幕
平成 11	12月31日	ミレニアム問題が騒がれる
平成 12	7月19日	二千年札発行
平成 14	10月1日	千代田区で全国初の歩きタバコ禁止条例施行
平成 15	3月20日	イラク戦争
平成 18	1月23日	ライブドア堀江社長が証取法違反容疑で逮捕
平成 19	7月16日	新潟県中越沖地震
平成 20	6月8日	秋葉原通り魔事件
平成 21	5月21日	裁判員制度が開始
平成 22	1月19日	JAL 会社更生法適用申請
平成 23	3月11日	東日本大震災
平成 24	5月22日	東京スカイツリー開業
平成 25	9月7日	2020 年東京五輪決定
平成 26	4月1日	消費税 8% へ
平成 27	3月14日	北陸新幹線開業
平成 28	4月14日	熊本地震
平成 29	11月8日	米大統領選でトランプ氏勝利
	9月9日	陸上男子 100m で、桐生祥秀が 10 秒台切る（09：98）
平成 30	11月19日	日産・ゴーン会長を逮捕
令和元年	5月1日	元号が平成から令和へ
令和 2	4月16日	新型コロナウイルスに対して全国に緊急事態宣言
令和 3	4月11日	松山英樹がゴルフ・マスターズで日本人初のメジャー優勝
	5月21日	医師の働き方改革関連 改正医療法成立
	7月23日	東京オリンピック 2020 開幕



▲外科／左端が北村龍彦現部長兼顧問、右端近森理事長の隣がカメラ目線の八木現消化器外科主任部長（以下、1996 年発行の『近森会 50 年の歩み』当時のもの）

「ひろっぱ」初登場 1987 年 8 月号総婦長代理就任時の梶原前統括看護部長



▲前列中央が浜重直久現部長兼顧問で 1988 年（S63）の着任より内科を担ってきた。左から川井和哉現循環器内科主任部長、吉村神経内科リハビリクリニック吉村耕一院長、榮枝弘司現消化器内科主任部長、山崎正博現脳神経内科主任部長



▲川添昇前管理部長（当時勤務 20 年目）



▲1985 年（昭和 61）着任の初代リハ病院院長の石川誠先生（旧リハ病院訓練室にて）



▲近森病院第二分院（現・総合心療センター）職員で。左端が 1981 年着任の田村分院院長



▲2002 年 7 月 ER 初代センター長就任時の川井現副院長



▲2000 年 7 月着任、心臓血管外科開設時の入江現副院長

「救いたい」「想いひとつに未来へと」

case presentation award 受賞報告

終始震えっぱなしの
初学会

初期研修医 2年目
森河内 萌



おめでとう！関西代表として全国学会へ推薦されました！

case presentation award 受賞

受賞学会 第64回関西胸部外科学会 6月17日～19日

招待学会 第74回日本胸部外科学会 10月31日～11月3日

演題 大腸菌による感染性大動脈瘤の切迫破裂をきたした1例

この度、6月にオンラインで開催されました第64回関西胸部外科学会で case presentation award 優秀賞を受賞させていただいた上記演題につきまして、第74回日本胸部外科学会へ推薦いただき発表して参りました。

昨今のコロナ事情でオンラインでの発表しか経験しておらず登壇するのは初めてであるのに加え、全国学会という規模の大きい学会で終始洞性頻脈と冷汗が止まりませんでした。声は震えつつもなんとか無事？発表を終えることができました。ま

た、実際に学会の空気に触れて参加者の間で交わされる熱い議論を目の当たりにし、病院・所属は違えど患者さんを救おうとする気持ちは皆一緒なのだと感じました。

私のような若輩者がこのような貴重な場での発表の機会をいただけたのも、単に先生方の根気強いご指導の賜物と思います。

人前で発言することが非常に苦手な私ですがこの経験を胸に、次に活かせるように今後とも精進致しますので、何卒宜しくお願い申し上げます。 もりこうち もえ

発表することが難しい学会で

近森病院 副院長 兼
心臓血管外科 主任部長 入江 博之



関西胸部外科学会での優秀賞のご褒美として、日本胸部外科学会総会での発表に招待されました。日本胸部外科学会は、心臓血管外科領域で最も大きな学会です。採択率も50%程度と低く、なかなか発表することが難しい学会となっています。

当然、初期研修医による発表は極めて少ないのが現状です。来年から心臓血管外科の道に進まれる予定ですので、今回の発表をモチベーションとして、精進してもらいたいと思います。 いりえ ひろゆき

ハッスル研修医

毎日が学び



初期研修医 津風呂 秀生

奈良県出身で、大学から高知に来て今年で7年目になります。全国で津風呂という名字は50人もいないそうです。ぜひ覚えてください。

4月から始まった初期研修もあつという間に8ヶ月経ち、もうすぐ今年も終わろうとしています。最初は何をするのも不安ですが上級医の先生方に頼っていましたが、先生方やメディカルスタッフの方々のおかげで、徐々に自分でもできることが増え、成長を感じる部分もあります。しかし、まだまだ力不足を感じることも多く、8ヶ月間で本当に成長できたのかと思う場面も多々あります。残りの研修生活も1日1日を無駄にせず日々成長し続けて行きたいと思います。

さて来年の4月から後輩が入ってきます。自分も入社当時は何も分からず不安に駆られる毎日でした。そんな時に医師として社会人として先輩である2年目の先生方がたくさんサポートしてくださいました。僕もそんな先輩方のようになれるよう頑張ります。早く高知の美味しいお酒をみんなで飲める日が来て欲しいですね！

つぶろ ひでき

幸運の予兆～主虹と副虹～

10月25日の夕方、2本の虹が本館、リハ病院の間にかかりました。くっきりした内側の輪が「主虹」、薄い外側が「副虹」で、太陽の角度や水滴の大きさなどの条件が重ならないと観測できないため、幸運の予兆とも呼ばれる虹です。



虹を撮影した職員から頂きました！ありがとうございます。

退職のご挨拶

近森は立ち止まらない。走りながら考える

近森オルソリハビリテーション病院 臨床栄養部 科長 吉田 妃佐

変革の38年間

「近森は立ち止まらない。走りながら考える」就任間もない近森正幸理事長のもと、止まない槌音を建造物からだけでなく、職員の身の内からも聞いた変革の38年でした。

諸先輩方から学び

名前入り包丁を卒業記念品に貰って厨房業務に就いた新人栄養士の目を、半地下厨房の外へ向けたのは理事長のご母堂・孝子さんで、検食簿には「患者さんに代わってお礼を言います」と記され、管理栄養士国家試験合格者にはご自宅からワインを

抱えてきてくださいました。最初にベッドサイドを指し示したのは近森正昭先生と石川誠先生で、正昭先生には『セルフケア』を、石川先生には『チーム医療』を熱意と共に学びました。

給食業務の委託化が完了した後、宮澤靖元栄養部部長が招聘され、2003年に栄養サポートチーム（NST）が稼働。運動と栄養を両輪に廃用症候群予防に取り組み、現在の管理栄養士の全病棟配置に至りました。日本初の精神科NSTの始動は、総合心療センターの先生方、スタッフのご

尽力によるもので、今も感謝しています。

2014年、落成式で見たヘリポートを中心に広がるヘルス



2013年2月号9頁掲載、
吉田科長ルポ

ケアシステム街の壮観さは、2002年に社会医療研究所の岡田玲一郎先生主催のアメリカ・カナダ医療視察で目にした光景と既視感のように重なり、「柳の枝に手は届かずとも飛ぶことを止めない蛙でいる」との川添昇前管理部長の言葉が思い出され、近森力の凄まじさに打たれた忘れぬ出来事です。

疾風怒濤の充実栄養士人生

1983年の入職以来、多くの方々に絶えることなく導き支えていただき感謝の念は尽きません。疾風怒濤、充実した栄養士人生でした。オルソリハビリテーション病院の皆様、近森会グループの皆様、お世話になりました。

よしだ ひさ



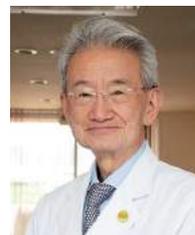
▲オルソで装具をつけての食事を体験



▲2002年アメリカ・カナダ医療視察で老年医学のフィッシャー博士と

近森の栄養サポートの礎を作って下さった吉田科長

社会医療法人近森会 理事長 近森 正幸



吉田妃佐科長は、1983年3月に入職され、もう38年になります。最初は父正博がリハビリや透析を行っていた駅前の分院（現 管理棟第二別館）に勤務され、1989年から近森病院へ異動、円満なお人柄で医師や看護師との信頼関係を構築し、さらにはエームサービスへの給食業務の外部委託を近森病院に導入、管理栄養士が臨床栄養に取り組む基礎作りを行ってくれました。

2000年には第二分院（現 総合心療センター）へ異動し、カウンセラーの資格も取得され、現在でもあまり行われていない管理栄養士の精神療法への参画を宮崎先生や明神先生のご指導のもと積極的に行い、2003年には日本初の精神科栄養サポートチームを立ち上げてくれました。現在はオルソリハビリテーション病院でカンファレンスや運営委員会にも積極的に参加し、全人的な栄養サポー

トを行って来ています。

仕事に対してもいつも真面目に真摯に取り組み、まわりのスタッフの個性や気持ちを汲み取り、みんながやりがいをもって働ける環境づくりに努めてくれました。誰にでも優しく、困った時には親身になって温かい言葉をかけ、励まし、支えてくれました。

退職後も若い栄養士の指導も兼ね、なんとか勤務を続けてもらいたいとお祈りしましたが、お母様との最後の人生を一緒に暮らしてあげたいという、本当に吉田さんらしい理由で今回退職となりました。長い間本当にありがとうございました。

ちかもり まさゆき



▲2005年NST開始3年目の臨床栄養部



▲精神科デイケア栄養教室反省会(?)

近森オルソ リハビリテーション病院 ★ 理美容再開 ★

コロナ禍を受け、中止していた美容師による院内での整髪を10月から再開しました。

久しぶりにカットした患者さんは、「入院して行けなくなったから、すっきりしてよかったよ」と髪も心もすっきりし素敵な笑顔が見られました。

今後も感染状況に応じて、患者さんが入院生活を快適に過ごせるよう調整していきたいと思えます。



インフルエンザワクチン接種 職員対象

「感染症をうつさない、うつされないために」近森会グループでは福利厚生、および近森会健康保険組合の保険事業の一環として毎年行っています。今年は一時的にワクチンの確保も危ぶまれましたが、希望者1,943名（内、外部職員335名）に接種を行いました。



◀三密を避けるため会場・日を分散して実施

2回目ワクチン接種後の新型コロナ抗体検査 職員対象

11月初頭、すでに2回のワクチン接種を終えたスタッフのうち希望者550名に抗体検査を行いました。

さらに感染対策チームでは、3回目のワクチン接種（12月以降）後の検査で、接種前後の比較を行う予定です。



リレー エッセイ

趣味を持つことの大切さ

近森病院 5階B病棟 看護師 山本 真生



皆さん趣味はありますか？私は、よく周りから多趣味と言われることがあります。いくつかの趣味の中で、今回は釣りについて話したいと思えます。

釣りを始めたきっかけは、釣り好きの父親の影響で幼い頃から釣りに興味を持つようになり、自然と釣りをするようになりました。釣りにも



いくつか種類があるのですが、最近主に私は船釣りを楽しんでいます！自分で沖まで船を操縦したかったので2年前くらいには船舶免許も取得しました。休みの日は船を借り、自分の操縦で沖にまで釣りに行ったりしています。そんな釣りの醍醐味は魚との駆け引きです。魚を釣るために糸を細くしたりルアーの種類を変えたり試行錯誤しながら釣りをしています。釣れる瞬間はとても嬉しく釣った魚をその場で捌いて食べる瞬間はなんとも言えない幸せな時間です。ですが、全く釣れないこともあり、釣れないときは耐える粘り強さが必要です。しか

し、釣り人なら分かると思うのですが、釣れない時間さえも楽しいのが釣りなんです！！

趣味があることで、普段の日常生活から離れ仕事の疲れやプライベートの悩みなどを忘れさせてくれて気分もリフレッシュさせてくれます！また、日々の業務は多忙で忍耐力が必要ですが少なからず釣りの時に鍛えられた粘り強さが仕事にも活きていると思っています。コロナが終息したら、釣り仲間と集まってフィッシングライフを再開したいです。

やまもと まさき

年明け1月号から『ひろっぱ』を 「株式会社ファクトデザイン事務所」さんと一緒に

2022年1月号から

「医療情報を共有し、また同じ職場で働く仲間とのコミュニケーションを図る」ツールとして創刊され35年、時代は変われども、近森らしさが伝わる誌面を目指し和田書房さんと一緒に創ってきました。その創刊の志を受け継ぎ、さらに進化させるため来年1月号から「株式会社ファクトデザイン事務所」を迎えてリニューアルします。ファクトさんはこれまでも病院パンフレット作成などにも携わって頂いております。一緒に明るく元気な「ひろっぱ」を作りたいと思います（ひろっぱ委員）



株式会社ファクトデザイン事務所さん ご挨拶

和田書房様からバトンを引き継ぎ1月号から『ひろっぱ』の制作をさせて頂くファクトデザイン事務所です。医療については素人ですが近森グループ様の仕事に携われることを誇りに思いチャレンジしてまいります。医療現場で精進される姿はもちろん仕事以外の横顔にも温かいスポットを当てていきたいと思っておりますのでご協力よろしく申し上げます。



▲左から、浦中翠（デザイナー）、三木亜希子（コピーライター・エディター）、明神ゆか（チーフデザイナー）、溝渕聡（取締役専務）※敬称略

総合心療センター ユニフォーム変更



リハビリテーション部のユニフォームが10月25日より変更になりました。

田村雅一先生書籍紹介 『一期一会 その式』

お求めは総合心療センターの清水秘書（内線6839）、または金高堂本店へ



2021年10月15日発行

お弁当拝見 97 最終回 貴重なお米



近森リハビリテーション病院
リハビリテーション部
作業療法士 石井 玲奈



仕事の時にはお弁当を持参していますが、これといったこだわりは特になく、しいて言えば毎日口にするお米でしょうか。実家の弟が仕事に行きつつ昨年よりお米を作ってくれているのですが、今年は長雨のせい

か収穫量が今年の4分の1となってしまうました。それも、さらに食べ物に対し感謝の気持ちを持つようになりました。

最近健康に気を遣い、白米だけ



でなく玄米を炊いてみたりしています。旬の食材を使ったおかず作りも頑張りたいです。 いい れな

和田書房様へ

毎号溢れる記事に 押しつぶされそうになりながら

表題は今年8月号の「ひろっぱ」創刊35周年記念に、和田書房の和田樹霖さんの原稿タイトルです。毎月溢れんばかりの記事に、憚りながら内外の読者からお褒め頂き、また近森の活発さの証左で嬉しいことですが、それを捌くためにいつも最後まで無理をお願いしてきました。この「ひろっぱ」を35年間、欠かさず発行できたのは和田書房様のおかげです。いくら感謝しても感謝しきれない思いを込めて。ひろっぱ委員一同

2021年10月の診療数 電子カルテ管理課

近森会グループ	
外来患者数	17678人
新入院患者数	1,119人
退院患者数	1,115人
近森病院（急性期）	
平均在院日数	11.82日
地域医療支援病院紹介率	99.82%
地域医療支援病院逆紹介率	280.88%
救急車搬入件数	606件
うち入院件数	342件
手術件数	569件
うち手術室実施	365件
うち全身麻酔件数	255件

編集室通信

朝夕の気温も下がり日中の日差しも和らぐこの頃、そろそろ温かい飲み物を恋しく思う人もいるのではないのでしょうか？私は、ベランダで淹れるコーヒーにはまっています。ミルで豆を粉砕するときのコーヒーの香りに癒され、ゆっくりドリップする時間を感じながら休日を過ごしています。身近にあるアウトドアシーンで、自然を感じながらリラックス効果を高めるのもいいですよ。ペンネーム 由似

一人だけでは、命は救えない。
共に闘ってくれる仲間がいるから
いつも見守ってくれる家族がいるから

繋がられる命がある。

「いってきます」も、言えない日がある。

ただ

絶対に救いたい命があるから。
絶対に繋げたい命があるから。

支えてくれる人がある。だから、私も支えたい。
「ただいま」を待っている、すべての人のために。

命を救う。命をつなぐ。

近森病院75周年 コーポレートメッセージ



診療支援部長
兼 企画課長

山崎 啓嗣

2021年12月、近森病院は開設75年の節目を迎え、このたび、コーポレートメッセージが決まりました。

メッセージには、先人から受け継いできた「医志」と患者さんやご家族、帰りを待つすべての人びとに向けた職員の「想い」が込められています。

上のポスターは、このコーポレートメッセージが入った職員手作りの作品（B0サイズ タテ103cm×ヨコ145.6cm）です。すべての職種が参加し色鉛筆で手塗りして仕上げられています。本館A棟3階検査室前の壁に展示していますので是非、ご覧ください。また、作成の様子は、動画でもご覧いただけます。右のQRコードで周年ページへアクセスください。



Making
延べ1,000人を超える
スタッフが参加しました。